慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	式亭三馬店双六「賑式亭まさる双六」：翻刻と解題
Sub Title	Transcription of and introductory notes to Nigiwai Shikitei masaru sugoroku : a publicity board game for Shikitei Sanba's shop
Author	津田, 眞弓(Tsuda, Mayumi) 康, 志賢(Kang, Ji Hyun) Moretti, Laura( ) Egorova, Nathalia( ) Bills, Joseph( )
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.38 (2023.) ,p.145 (70)- 180 (35)
JaLC DOI	
Abstract	In nineteenth-century Edo (present-day Tokyo) commercial publications designed for entertainment also included multifarious advertisements for cosmetics and medicines, doubling up as publicity materials. Shikitei Sanba's shop (Shikitei Sanba mise 式亭三馬店) is renowned for having enthusiastically propelled the creation of such materials. The present contribution, penned by a group of like-minded scholars who are part of the Research Group on Early Modern Japanese Literature (Kinsei bungaku kenkyūkai 近世文学研究会), offers the diplomatic and semi-diplomatic transcriptions of one of these items. It takes the form of a board game known as sugoroku 双六, more precisely e-sugoroku 絵双六 (pictorial sugoroku) similar to the European game of the goose, designed as a complimentary gift for the customers of Sanba's shop. It is part of a group of materials that are particularly valuable for the study of the advertising culture of early modern Japan. The material transcribed here is known under two titles: Nigiwai Shikitei masaru sugoroku 賑式亭まさる双六 (The Bustling Shop of Shikitei Sanba: a Sugoroku Board Game, around 1848) and Edo no mizu masaru sugoroku 江戸の水まさる双六 (The Water of Edo from Shikitei Sanba's Shop: a Sugoroku Board Game, 1864). Both are kept at the National Diet Library. As their titles imply they focus on Shikitei Sanba mise itself, displaying 22 items that could be purchased within. But there is an interesting twist: each item

	is personified as a famous kabuki actor. Whilst the contents of the two materials are almost identical, we note differences in how the actors are depicted.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20230630-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

式亭三馬店双六「賑式亭まさる双六」

――翻刻と解題――

津田眞弓
康志賢
ラウラ・モレッティ
ナタリア・エゴロワ
ジョセフ・ビルズ

Abstract

In nineteenth-century Edo (present-day Tokyo) commercial publications designed for entertainment also included multifarious advertisements for cosmetics and medicines, doubling up as publicity materials. Shikitei Sanba's shop (*Shikitei Sanba mise* 式亭三馬店) is renowned for having enthusiastically propelled the creation of such materials.

The present contribution, penned by a group of like-minded scholars who are part of the Research Group on Early Modern Japanese Literature (*Kinsei bungaku kenkyūkai* 近世文学研究会), offers the diplomatic and semi-diplomatic transcriptions of one of these items. It takes the form of a board game known as *sugoroku* 双六, more precisely e-sugoroku 絵双六 (pictorial sugoroku) similar to the European game of the goose, designed as a complimentary gift for the customers of Sanba's shop. It is part of a group of materials that are particularly valuable for the study of the advertising culture of early modern Japan. The material transcribed here is known under two titles: *Nigiwai Shikitei masaru sugoroku* 賑式亭まさる双六 (The Bustling Shop of Shikitei Sanba: a *Sugoroku* Board Game, around 1848) and *Edo no mizu masaru sugoroku* 江戸の水まさる双六 (The *Water of Edo* from Shikitei Sanba's Shop: a *Sugoroku* Board Game, 1864). Both are kept at the National Diet Library. As their titles imply they focus on Shikitei Sanba mise itself, displaying 22 items that could be purchased within. But there is an interesting twist: each item is personified as a famous kabuki actor. Whilst the contents of the two materials are almost identical, we note differences in how the actors are depicted.

はじめに――本稿の目的

十九世紀の江戸で商品として出版された娯楽的読み物には、化粧品や薬の広告が巻末などに付されるだけでなく、作中にもさまざまな形で盛り込まれ、広告媒体としても機能していた。これらは江戸の文化史においても貴重な資料群で、幅広い分野から興味深い資料や事象について報告がされてきたが[1]、文芸の場における広告について網羅的な研究は未だなされていない。そこで近世文学研究会（旧草双紙研究会、アダム・カバット氏幹事）の有志で、十九世紀の江戸で最も熱心に化粧品や薬の広告を制作し続けた「式亭三馬店」（江戸本町二丁目）に注目し、同店の景品として製作された双六「賑式亭まさる双六」（式亭小三馬作・三代歌川豊国画）の翻刻を行った。本資料は改印（検閲印）から嘉永初年（一八四八）頃制作されたと思しいもので、時期的に天保改革の出版統制で禁止された役者似顔絵が浮世絵や草双紙に、また草双紙の表紙に多色の色摺りが戻ってきた頃のものである。今回は紙幅の都合もあり、翻刻の完成をめざすことを第一とし、翻刻と商品の価格など簡単な注のみ付した。

なお、本資料の絵師、三代歌川豊国の専門家である藤澤茜氏に本資料と、元治元年（一八六四）に改題して似顔絵を一部入れ替えた「江戸の水まさる双六」について、似顔絵に関する教示を得る機会を得た。同氏のご協力に心より感謝する。研究を深化させる手がかりとなるその指摘については、各コマの注と、巻末にまとめた今後の課題の部分に示すこととする。

（津田）

式亭三馬店とその広告の意味

双六は江戸時代後期、人気のあるボードゲームであり、紙一枚の印刷物ゆえに持ち運びやすく、よい土産物とされていた。周知の通り広告媒体としても使用され、山本正勝や坂口由之らが紹介しているように[2]、様々な店が双六を景物（客への配り物）としてよく製作していた。袋（包み紙）に入れて、新年や開店に際して配られることもあった。

今回翻刻をするのは、式亭三馬店の双六「賑式亭まさる双六」である。式亭小三馬が作成したもので、飛び双六（サイコロを振って出た数で指示されたコマに飛ぶ）の形式で、コマの中は商品の絵ではなく、歌舞伎役者が商品に扮した姿で描かれ、細かい文字で、擬人化した商品の名乗り（歌舞伎の台詞における特別な七五調の自己紹介）が書かれている。

三馬の伝記研究や広告研究で紹介されるように[3]、式亭三馬は萬屋太治右衛門として本屋経営の経験を持ち、文化七年（一八一〇）十二月二十六日に江戸の本町二丁目に「仙方延寿丹売薬店」を開店し、作者としての技量を活かし、先行の山東京伝の店を意識してより積極的に引札（広告チラシ）や景物本を書いた。前出の坂口本によれば、三馬の死後、息子の式亭小三馬が三馬店を継いでから、景物本だけでなく、扇子や双六も宣伝として使うようになったという。

江戸文芸に親しんでいる人々にとって、平賀源内や山東京伝の引札に代表されるような、戯作者が制作した広告は見慣れた物で、物を擬人化させたキャラクターも、ごくありふれた表現手法である。故に驚きもなく三馬店の広告類は戯作者の仕事の一部として取り扱われてきた。しかし、世界の広告史の上から考えれば、とても珍しいものであると言わねばならないだろう。古い時代の広告は識字率の低さから、どこの国でも看板などに視覚性が利用されている

が、この双六の視覚性は次元が違う。

また十七世紀・十八世紀の欧米の広告といえば看板、新聞広告、ポスターなどが中心であり、為永春水の人情本における仙女香の embedded in narrative（物語に組み込まれた）の宣伝、草双紙式の景物本やこの双六など、日本の広告は相当に凝っているという印象がある。[4] 例えば榎本悟らによれば、アメリカにおける広告の機能が商品や商売の名称や存在を告知するだけの消極的役割を果たすに過ぎなかった時代を、一八六〇年代以前としている。また南北戦争前までには、売薬を中心とする商標名を利用した広告が制作されたが、消費者に対してよりも、商品に価値をおいてくれる小売業者向けであった。[5] 多彩な視覚性をともなって一般に向けて制作した戯作者の広告とは、そこが大きな違いとなる。

さらに言えば、登場人物の台詞で構成されるこの双六の表現は、現在の広告分析で言われる、顧客の心を動かし、批判的な考えを減少させ、商品の評価を高めるという narrative advertising（物語型広告[6]）の一種と考えられるだろう。福田怜生によれば、こうした手法が現代の広告で注目されるのは、一九八〇年代後半になってからのようである。[7]

また、この物語型広告という形式だけでなく、小三馬の双六はボードゲームであるということも、重要視されなければならない。何故ならば、二十一世紀の現在、advergames（広告ゲーム）が注目されているからだ。[8] これはビデオゲームの広告、あるいはそのゲーム自体が広告であるものを指す。小三馬の双六は、果たしてこうした広告の魁として位置づけられるのだろうか。

以上のことを踏まえると、本資料が日本ではとりたてて珍しいものではないとすれば、江戸時代の人々が楽しんだ遊び心のある広告は、マーケティング戦略の創造性を体現するものであり、国際的に先進性が高い可能性があると言

図１　「賑式亭まさる双六」（国会図書館蔵）

える。故に、多角的な研究によって広告史に位置づけられることが期待されよう。もちろん、戯作者の広告を誕生させる土壌となったのは、社会を構成する人々が持っていた文字や図の読み書き能力の高さであり、彼らが好んだ江戸時代の視覚性の高い印刷物の存在である。その意味で本資料は、その時代性、すなわち社会で通用していた表現、商人たちの商才、市場といった様々なものの特性をあぶり出す重要な手がかりであると考える。（エゴロワ）

翻刻

今回の翻刻は、くずし字学習者にわかりやすい資料を提供するため、原文をそのまま掲出し、本文について考察を加えた校訂文を添える形をとった。翻刻は国会図書館デジタルコレクションで公開されている左（図１）の資料を用いる。簡単な書誌は以下の通りである。

■題名　「賑式亭まさる双六」
■著者　式亭小三馬（作）・三代歌川豊国（画）
■板元　式亭三馬店

図２　改印

■改印　「吉村」「村松」

■刊年　弘化三年（一八四六）末～嘉永二（一八四九）年[9]正月。「御年玉」袋等残存なく未詳。双六は墨摺一枚、大きさ縦三十三・六cm×横四十五・三cm。

■装丁

■旧蔵者　根岸信輔（「根岸信輔氏寄贈」朱印あり）

■所蔵　国立国会図書館　本別9-27第10袋［1］　DOI: 10.11501/1310678（二〇二三年三月一日参照）

なお、同図書館には同名の双六（本別9-27第10袋［2］、やや印刷が鮮明だが、虫損が多い。改印・絵・文章に異同無く、袋等もなし。縦三十三・四cm×四十四・八cm）と、ほぼ同内容の「江戸の水まさる双六」（寄別8-3-2-7、書誌等後述）がある。後者には色摺りの袋が残り、元治元年の年記のある序文が添えられているので、参考資料として巻末に掲載する。

付け加えれば、三馬店の双六は彩色もされていた。本稿で言及した双六だけでも、東京都立中央図書館が蔵する「賑式亭繁栄双六」（07516-S1/東S07516-S001）、「初商出世双六」（07516-S1/東S07516-S001）は色摺である。刊行時期や印面の様子から、前者は明らかにかなり後に彩色されたものと判断できるが、後者は初印時のものか、判断は難しい。故に、本資料も刊行当時、または後印で色摺がなされた可能性がある。

さて、飛び双六を取り扱う際、コマの順番をどうするかという問題がある。研究会で様々先行研究について教示を受けたが、主として二つの方法に集約された。一つは、双六の遊び方に準じ「ふりだし」のある下から翻刻を示すもの[10]。一つは、番付と同じ要領で、上から下へ、各段の右から左に移動するもの[11]。今回は本稿の目的から、近世文芸の

図3　翻刻順番

広告資料として飛び双六を紹介された佐藤悟氏の後者の方法に従った。

凡例

◆翻刻は原則として書誌に記した「賑式亭まさる双六」（図1、国会図書館本別9-27第10袋［1］）にて行い、同名の双六（本別9-27第10袋［2］）、改題後印の双六「江戸の水まさる双六」（図4）を適宜参照し、差異は注に記した。

◆図3に示した順番に従って翻字を示す。

◆翻字は、双六表題・袋・序文については原文通りに翻字をし、ほとんどひらがなで書かれているコマ中の台詞部分については、原文通りに翻字をした後、校訂文を付した。また漢字は現在通用の文字に直した。紙幅を節約するため、多くの箇所で改行を「／」で示して文を続けた。また割注を《　》で示した。虫損部分は□で示し、横に（　カ）と補った。

◆校訂文は、読みやすさのため意味を鑑み漢字に直し、濁点・句読点を加えた。なお、原文にあるふりがなを略した。踊り字に

ついては、原則として「ゝ」「〻」「〳〵」などをそのまま残したが、誤読を恐れる箇所についてはわかりやすさを優先して現行の文字に直した。掛詞については、副次的な意味を（ ）に入れた。

◆掲載されている商品の値段について、天保改革前の小三馬作・初代歌川国貞画「まさる商七福双六」（東京都立中央図書館蔵、887-S1/東S887-S001、天保期刊か）、改革直後の小三馬作・三代歌川豊国画（初代国貞）「賑式亭繁栄双六」（国立国会図書館蔵、寄別8-3-2-7、改印「村田」、天保十四年から弘化四年刊）、改革から時間が経った小三馬作・初代歌川国輝画「初商出世双六」（国立国会図書館蔵、寄別8-3-2-7、改印「改・寅九」、安政元年九月刊）を参考に注記した。注において「まさる商七福双六」を「七」・「賑式亭繁栄双六」を「繁」・「初商出世双六」を「出」と略記する。

◆藤澤茜氏に指摘を受けた役者名は原則として「賑式亭まさる双六」の弘化三年末から嘉永二年時の名前を記した。

＊一段目

コマ1

［上部］《恩恵（めぐみ）を江戸（えど）の水（みづ）の筋其商（すぢそのあきな）ひも／三ツ升（みつます）や吉例（きちれい）かはらぬ春（はる）の吉相（きつさう）／今尚栄（いまなほさか）ふる三馬叟（さんばさう）が金（こがね）の種蒔（たねまき）》

［題名］賑式亭（にぎはしきてい）［商標（まさる）］双六（すごろく）

コマ1

［下部］《小三馬作／豊国画》／［熨斗の絵］／御歳玉／《うり物には／不仕候》／《江戸本町二丁目北側中程／式亭三馬店［印］》

＊「江戸の水まさる双六」は上部・題名部分が全部削られ、大きく「江戸の水［商標］双六」と題名のみに修正。

コマ2

金勢丸勇光《二上リ　三せいり丸／四雪の友　五一夜なほし》

〽五斗びやうゑのそのうへを／のんでゆらるゝゆらどのゝ／むかしはおろかかの／すいてうきのだい／じやぐわんぢわうぼうだる／つゞけのみのおかたでも／このゑひざましを／もちふればわるゑひ／せぬきんせいむるゐの／きんせいだらうと／よくごぞんじの／ゑひざましみしつておいて／もらひませう

〽五斗兵衛のその上を呑んで揺らるゝ由良殿の昔はおろか、かの水鳥記の大蛇丸地黄坊だか、続け飲みのお方でも、この酔ひ覚ましを用ふれば、悪酔ひせぬ近世無類の金勢（謹製）だらうと、よくご存じの酔ひ覚まし、見知っておいて貰ひませう。

（注）値段は百文・五十文（**七・繁・出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも四代目坂東彦三郎。

コマ2

コマ３

コマ３

花野吾妻姫《三上リ　四えりおしろい／五三津の友　六天人香》

〽しなもよしの、花のながめに／日々におきやくの／やまとざけあがつまは／やとおんかへりみを／たまはりてなに／たちばなのあ／づま香いかなる／くものうへびとの／みかほにのりてうつ／くしとみかへるとのごの／みかげさへつ、むに／あまるたたういり／そのはこ入のしつくりとはなれぬ中の／いもとせもまたのあふせをまつてゐるぞへ

〽品も吉（良し）野の花の眺めに日々にお客の大和（山と）酒、あが夫早と御帰り、身を賜りて名に橘（立ち、花）の吾妻香、いかなる雲の上人の御顔にのりて美しと、見返る殿御の御陰さへ、包むに余る畳紙入り。その箱入のしっくりと離れぬ中の妹と背も、またの逢瀬（仰せ）を待ってゐるぞへ。

（注）商品名は「吾妻香」。値段は畳紙入り百文・五十文・三十二文（**七・出**）。百五十文、桐箱詰一匁五分・一匁・五分もあった（**繁**）。「賑式亭まさる双六」の似顔絵は四代目尾上梅幸（三代目尾上栄三郎）。「江戸の水まさる双六」の似顔絵に変化があるが未詳。

コマ 4

コマ 4

上り　三馬天女丸貴方（みつまてんにょまるたかかた）

〽げにや天女のみつげも／かくやすがたはまろき／丸やくのたいをめぐれば／ふじゆんのつうずるそのかう／たぐひなか〳〵もつて／たやくのおよばぬ／そのきゝめその／薬方もやはら／かくたをやか／なりし／女子すがたも／かねてよういの／はたにはきごみ／こてすねあて五／ぶでもすかぬそのきゝ／めはみなさまごぞんじ天女丸たかかたが／いさをしみせんこゝちよやなア

〽げにや天女の御告げも斯くや、姿は丸き丸薬の、体を巡れば、不順の通ずるその効、類ひなか〳〵もって、他薬の及ばぬその効き目。その薬方も柔らかく、たをやかなりし女子姿も、兼ねて用意の肌には着籠、小手、脛当、五分でも空かぬその効き目は、皆様ご存じ天女丸貴方が功し見せん、心地良やなア。

（注）値段は百二十四文（**七・繁・出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも初代中村福助（四代目中村芝翫）。

金陽丸良方（きんやうまるよしかた）

〽それくすりのはかりことをき／やくのうちにめぐらしうることを／千里のほかにひゞかするは／ぐんしにひとしきわが／かうのう江戸の水と／金やうは金生水の／あきなひもの／さばへなすむし／どもをたいぢして／くんしんわがふの／さかもりにかほは／ほんのりあさ日の出／はるあけぼのゝ／うるはしやなア

〽それ、薬の計略を奇薬のうちにめぐらし売ることを、千里の外に響かするは、軍師に等しき我効能。江戸の水と金陽は金生水の商ひ物。五月蝿なす虫どもを退治して、君臣和合の酒盛りに、顔はほんのり朝日の出。春曙の、麗しやなア。

（注）値段は百文・五十文（**七・出**）。この他、一粒六文でも販売した（**繁**）。**出**によれば小児の虫下しの薬。似顔絵は「賑式亭まさる双六」は二代目片岡我童（八代目片岡仁左衛門）、「江戸の水まさる双六」の似顔絵に変化があるが未詳。

コマ 5

コマ 5

天人香の精（てんにんかう　せい）《一上り　二三津の友／四はやめ　五薄げしやう》

〽わらはこそあまつやの／おとめとはかりのな／まことは三馬のめい／はう天人香の／せいれいなりむか／しもかくやかくや／ひめかのたけとり／のおきなぐさきく／のちよまでおも／かげのかはらで年ごと

／わかやぎてことにおとわやおもし／ろう世の女子をばこと〴〵く／うるは四季ともおもとめあるは／天人香気のすぐれたゆゑであるはいナア

〈わらはこそ天津屋の乙女とは仮の名、真は三馬の名方天人香の精霊なり。昔も斯くや（嗅ぐや）、かぐや姫、かの竹取の翁草、菊の千代まで面影の変はらで年毎若やぎて、殊に音羽屋面白う、世の女子をば、悉く売るは四季（麗しき）とも、お求めあるは天人香、気の優れた故であるはいナア。

（注）白粉。値段は箱詰め二匁、畳紙入りが百五十文（**七・出**）。**繁**に商品の記載無し。似顔絵は「賑式亭まさる双六」は初代中村政次郎（二代目中村福助）、「江戸の水まさる双六」は四代目尾上菊五郎か。文章からもともと音羽屋尾上菊五郎にかかわる人物の顔だった可能性がある。

コマ6

コマ6

はみがきの助六（すけろく）《一雪の友　二薄げしやう／三あづま姫　四上リ》

〈わしやア花川戸の助六とも／またはみがきの助六とも／いはるゝ男だてこのはみがきで／みがいたはのあいだから／のぞいてみろあはかづさは／うきゑのやうにみへる／かひてがふへりやア／りようにみづきん／りうざんのきやく／てんから目ぐろのだい／までごぞんじしられた／くすりはみがきだれだと／おもふア、すなもねへ。

〈わしやア、花川戸の助六とも、また歯磨きの助六とも言はるゝ

男伊達、この歯磨きで磨いた歯の間から覗いてみろ。安房上総は浮き絵のやうに見へる。買ひ手が増へりやア滝に水、金竜山の客殿から、目黒の台までご存じ知られた薬歯磨き、誰だと思ふ。ア、砂もねへ。

（注）値段は百文・五十文・三十二文（**出**）。五十文・三十二文（**七・繁**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」は三代目市川市蔵、「江戸の水まさる双六」は六代目市川團蔵か。

＊二段目

コマ7

吾妻婢女艶布（あがつまのこしもとつやぬの）《二あづまひめ　三はみがき／四えりおしろい　五天人香》

コマ7

〈おんものまうでごゆさんの／をりからおともははづれぬ／このつやぬのとりわけ／ほかのせいほうより／にほひもかく／べつようつとむると／だん〳〵ひろまる／しゆつせのみのうへ／ありがたい／ことで／ござりますなア

〈御物詣、御遊山の折から、お供は外れぬこの艶布。とりわけ他の製法より匂ひも格別、良う勤むると、段々広まる出世の身の上、有り難いことでござりますなア。

（注）値段は百三十二文・百文・五十文（**七・繁・出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも二代目尾上菊

次郎。

コマ８

コマ８

妙あらひ粉お夏《三えりおしろい　四薄けしやう／五あづま姫　六にせの水》

〈もろ人のなつきてひらく／ふくぼたんじやうずのなとり／くさ〻のそのあらひこの／うへをゆくわたしが／妙のいちじるき／かをりはことに／ふかみぐさ／妙あらひこの／おなつといふ／あい江戸製／でござんす／はいなア

〈諸人の懐きて（夏来て）開く福牡丹、上手の名取、種々の、その洗ひ粉の上を行く私が妙の著き。香りは殊に深見草、妙洗ひ粉のお夏といふ。あい、江戸製でござんすはいなア。

（注）値段は五十文・二十四文、筒入り百二十四文（**七・繁**）。五十文・二十四文（**出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも坂東しうか。しうかは安政二年に歿しているので、「江戸の水まさる双六」では死後も登場していたことになる。

コマ９

聖利丸直通《二一夜なほし　三即効太／四はみがき　五けはへ》

コマ 9

コマ10

〽くさも／木もしたがひ／なびく大君の／めぐみにうるほふ／あめが下げに／せいじんはたみを／利すもろこしの／夏の禹王が古事／にならひし聖利丸／すぐみちは三馬がみせの／しんざんしんせいごひいき／ねがひあげまする

〽草も木も従ひ靡く大君の、恵みに潤ふ天が下。げに聖人は民を利す。唐土の夏の禹王が古事に習ひし聖利丸直道は、三馬が店の新参。新製御贔屓、願ひ上げまする。

（注）値段は五十文（出）。七・繁に商品の記載無し。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」ともに同じ、未詳。岩井系の顔か。

コマ 10

薄化粧のお雪《一あづま姫　二金勢丸／三はみがき　四三津の友》

〽なつげしやううすおしろいの／うへなしとみなさんがたの／ごひいきになほさら／つやをまし／うれもまさる／のだていしやう／こしに尺八／たけのねのすぐ／なるおかほへ／のりもよくうすく／きれいなうす／げしやうのおゆきといふ／アヽイ江戸の水のいもとぶんさ

〈夏化粧薄白粉の上なしと、皆さん方の御贔屓に、尚更艶を増し、売れも勝る（商標）野点衣装。腰に尺八竹の音のすぐなるお顔へのりも良く、薄く綺麗な薄化粧のお雪といふ、アヽイ、江戸の水の妹分さ。

（注）値段は百文・五十文（**七・繁・出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも三代目岩井粂三郎。しかし両者の似顔絵には変化がある。

コマ11

毛生之助玄妙《一雪の友　二一夜なほし／三天人香　四せいり丸》

〈わがみはうすい人のけをはやすゆゑ／そのなものび田けはへの介くろたへ／きみをおもふもみせのはんえい／おほしたてたるかみのけの／ながきめぐみをあほぐのみ／それ博物志には／人を小天地に／たとへかみのけを／くさになぞらへし／まつそのごとく／くさ木もなびく／きみが代につやうるはしきかみかたち／こゝろすぐなるおもかげぢやなア

〈我が身は薄い人の毛を生やす故、その名も伸田毛生之介玄妙。君を思ふも店の繁栄、生ほし立てたる髪の毛の、長き恵みを仰ぐのみ。其れ博物志には、人を小天地に譬へ、髪の毛を草に擬へし、先づその如く草木も靡く君が代に艶麗しき髪形、心直ぐなる面影ぢゃなア。

コマ11

（注）値段は百文・五十文（**七・繁・出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも坂東竹三郎（五代目坂東彦三郎）。

コマ12

コマ12

伊吹艾右衛門陳久《一黒平　三金勢丸／四百日せき　五はやめ》

〈それがしはいぶきもぐさゑもんとて／かはきり三火はしつかりとおさへ／やくのつけがらうおなかのことは／大から小までのこらずむねを／すへてかゝれば百病百虫ひつからめ／ねつきりはつきりやまひ／きりと火気身たいに／めぐるをりしも西に／あたつてあか〳〵とつも／れる雪のいさましさ／灸後にふじをみつ／まさるときにとつて／のさいさきよしめでたい／このばのながめぢやなア

〈某は伊吹艾右衛門とて、皮切三火はしっかりと抑へ、役（灸）の付（点け）家老、お腹の事は大から小まで残らず胸を据へて懸れば、百病百虫引っ絡め、根切葉切、病切りと、火気身体に廻る折しも、西に当たって明々と積れる雪の勇ましさ、灸後に富士（不死）を見つ（水）まさる（商標）。時に取っての幸先良し、めでたいこの場の眺めぢゃなア

（注）値段は、四十文・二十文・八文（**七**）、四十文・二十文（**出**）、**繁**に商品の記載無し。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも四代目坂東三津五郎（十一代目森田勘彌）。しかし両者の似顔絵に

は変化がある。

＊三段目

コマ13

雪野友成《三つやぬの　四金勢丸／五はみかき　六即効太》

〽このらんじやたいの／めいかうは三馬の／てうほうあづかり／やくはかくいふゆきの／友なり兄花のえん／大夫月のながめもろ／とも三つのながめと／人ごとにおもとめ／あるおほんめぐみは／かうべにつもる／むつのはなやかはな〳〵しい／かうきを／おはなにいるゝでござらう

コマ13

〽この蘭奢待（袋）の名香は三馬の調法、預かり役は斯くいふ雪野友成、兄花の宴大夫、月の眺め、もろとも三つの眺めと、人ごとにお求めある御恵みは頭に積る、六つの華（六花）やか華々しい香気をお鼻に入るゝでござらう。

（注）商品名は「蘭奢袋」、匂い袋。弘化四年『五色染苧環冊子』初編下（十六オ）によれば、「雪の友」は金百疋、「月の眺」は金百五十疋、「花の宴」は金三百疋、「四季の友」は金五十疋。**七・出**には「四季の友」・「御匂ひ袋」の値段は金二朱（＝金五十疋）とある。**繁**では雪月花の三種の商品名が

出るが、「花の宴」だけが金二百疋と、『五色染苧環冊子』より百疋安くなっている。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも二代目市川九蔵（六代目市川團蔵）。

コマ14

百日（ひやくにち）せきの助直治（すけすぐなほ）《二伊吹艾　四一夜なほし／五けはへ　六黒平》

へとめた〳〵おつとめた一ばん／とまつてくんさるなら／かたじけなまゑのあと／ひき酒ながくていきな／ゆきのゐつゞけながくて／きれいなをながどり／ながくてきたない／うしのせうべん十八丁は／さておいてのどに百日せき／をすへそのゐつゞけはうんざりだ／あさひなならぬあさまたき／あさめしまへのおちやのこで／ちよつとなほすがえてものゝ／本町庵のおくすりだアもさ

コマ14

へ止めた〳〵、おっ止めた。一番止まってくんさるなら、添じけ生酔の後引き酒、長くて粋な雪の居続け、長くて綺麗な尾長鶏、長くて汚い牛の小便十八丁はさておいて、喉に百日咳を据へ、その居続けはうんざりだ。朝比奈ならぬ朝まだき、朝飯前のお茶の子でちょっと治すが得手物の、本町庵のお薬だアもさ。

（注）値段は百文（**七・繁・出**）。似顔絵未詳。「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」の似顔絵に変化がある。

コマ15

コマ16

コマ15

人参即効太（にんじんそくかうだ）《一せいり丸　二はみがき／三はやめ　四にせの水》

へめでたいきつさう／ごちうしん〳〵と千里ひとゝび／はやばしりそくしつきは／おろかな事すいこでんの／神行太保たいそう／きくとごひやうばん／八百里をば一トとびに／はせ川の大じかけ／まくなしのはやがはりも／およばぬにんじん／即効でせヱ／またもやかうのう／おしらせまう／さん

へめでたい吉相、御注進〳〵と千里一飛び早走り、足疾鬼は愚かな事、水滸伝の神行太保、戴宗（大層）効くと御評判、八百里をば一と飛びに長谷川の大仕掛け、幕無しの早変はりも及ばぬ、人参即効でせヱ。又もや効能、お知らせ申さん。

（注）貝に入った油薬（**七**）。値段は五十文・二十四文（**七・繁・出**）。

似顔絵未詳。「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも似顔絵に変化がある。

コマ16

にせの水《この所へあたる人は／一代でることならず》

〻にせ組のわるものどもせつぶんの鬼のごとくどこかみつけて／みせをだしおしうりせんとうろつく所を江戸の水つやの介が年／男ずつとかうきもますらをのまめのつぶてに鬼もろともに／おひつめ／られ／つひに／二代／でること／ならず

［台詞］にせ組ども／〻とても江戸の水には／およばぬ／〳〵／西のうみへ／さらりと／やめるが／いちのて／〳〵

〻偽組の悪者ども、節分の鬼の如く、どこか見つけて店を出し、押し売りせんとうろつく所を、江戸の水艶の介が年男、ずっと高貴もます（増す）らをの豆のつぶてに、鬼もろともに追ひ詰められ、遂に二代出ることならず。

［台詞］偽組ども〻とても江戸の水には及ばぬ〳〵。西の海へさらりとやめるが、一の手〳〵。

（注）「にせの水」（**出**・**繁**）、「類薬《江戸の水のおつかぶせ》」（**七**）、「よその見世」（**七**）、「紛れ物《あづま布のおつかぶせ》」（**繁**・**出**）などのコマがある。偽造品の注意喚起の一種。

コマ17

コマ17
一夜治四郎速《三天人香　四せいり丸／五けはへ　六はやめ》
〻五風十雨も／時をたがへず／すなほな御／代にみなれぬ／うぬはさてはきこ／ゆる風の神だな／けとうじんを／おつかへすその／かみかぜや一夜／なほ四郎すみやかが／手のうちみせん／いさましや／なア

〈五風十雨も時を違へず素直な御代に見慣れぬうぬは、さては聞こゆる風（風邪）の神だな。毛唐人を追っ返すその神風や、一夜治四郎速が手の内見せん、勇ましやなア。

（注）値段は二十八文・五十文（**七・出**）、二十八文（**繁**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも四代目市川小團次。

コマ18

跡原治が妻早梅《一伊吹艾　四妙あらひこ／五つやぬの　六金勢丸》

〈つねく〉におつとを天とうやまひて／ちの道もしる女かしこきとは／さきに名だゝる大人がたはれうた／天とうやまふ貞女／けん女もしゆうと／やまひにかたれぬ／ならひとかく女子／につきものゝその／ちの道をなほす／わたしは三馬のめうやく／さんやう湯太夫がせがれ／あとばらなほるがつまのはやめ／おみしりおかれてくださりませ

コマ18

〈常々に夫を天と敬ひて血の道も知る女賢き、とは先に名立たる大人が戯れ歌。天と敬ふ貞女、賢女も、主と病ひに勝たれぬ習ひ。とかく女子に付き物の、その血の道を治す私は三馬の妙薬、三養湯太夫が倅、跡原治が妻早梅、お見知り置かれてくださりませ。

（注）商品の記載無し（**七・繁・出**）。ただし、右に言及される「三

養湯」はあり、百三十二文・百文・五十文（**七・繁**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも五代目市川團之助。

＊四段目

コマ19

局朝日野《一百日せき　二はやめ／三せいり丸　四三津の友》

〈わたしはりやうじゆさんのおかげで／目賀よいちあきみつ公の老女／そのなもあさひのでたちばへ／きもはるのひの／うらゝかさはれ〴〵と／よものけしき／みうまがみせの／めのりやうやく／てんぢくにてちゑ／すぐれしりやう／じゆぼさつの／ひはうゆゑことさら／きゝめがちがふぞへ

〈私は霊鷲山（龍樹散）のおかげで目賀世一（目がよい）顕光公の老女。その名も朝日野（朝日の）出立映へ、気も春（張る）の日の麗らかさ、晴々と四方の景色、三馬が店の目の良薬、天竺にて智恵優れし霊鷲（龍樹）菩薩の秘宝故、ことさら効き目が違ふぞへ。

コマ19

（注）値段は三十六文（「御目あらひ薬」**七・繁・出**）。文化九年（一八一二）『江戸水福話』三巻（十五ウ）によれば、商品名は「龍樹散」。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水ま

さる双六」とも初代市川新車か。

コマ20

コマ20

積の黒平《二雪の友　三即効太／四けはへ　五伊吹艾》

へそれ黒色は北方水位北は子に／して大こくのつかはしめなる福／ねずみそれくろのたふときことは／げんじの大しやうくらうよしつね／のらせたまふはたいふぐろ／これそのころのめいばに／して哥人にくろぬし／たてしゆにくろふね／すなはちしやくの／くろ平とはくろで／たいらぐなのえんぎ／まつくろごくの上上吉／くろいをじまんのくろでたち／しやくのむしめをかくのとほり／なによヲ小積なフハ、、、

へそれ黒色は北方水位、北は子にして大黒の使はしめなる福鼠、それ黒の尊きことは源氏の大将九郎義経乗らせ給ふは大夫黒、これその頃の名馬にして、哥人に黒主、伊達衆に黒船。即ち積の黒平とは、黒で平らぐ名の縁起、真っ黒、極の上上吉、黒いを自慢の黒出立ち。積の虫めを斯くの通り。何よヲ小積なフハ、、、。

（注）値段は百文・五十文（**七・繁・出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも三代目關三十郎（弘化・嘉永頃の姿）。

コマ21

コマ21

うりだし／五月　吉例《小三馬作／豊国画》絵ざうし

けいぶつ 奉差上候

江戸の水／艶之助

〽めでたいはるの／せつぶんにふくは／うちはのにぎはひて／けふとしこしの／おにやらひおには／そとよりしのび／いるうぬはたしかに／にせの水だな／薬水のよこ／づなとそのなも／日のでの山なすうりだか／水の中での水一ばん江戸／の水ぎはたてものといまや／わかてのはやりッ子が／おにうちまめにおつぱらへば／うぬらがはなもあくまがう／ふくおんてきたいさんにしの／うみさらり〳〵とおひ／こくるあらこゝちよい／ありさまぢやよなア

〽めでたい春の節分に、福は内はの賑はひて、今日年越しの鬼遣らひ。鬼は外より忍び入る、うぬは確かに偽の水だな。薬水の横綱と、その名も日の出の山なす売り（茄子・瓜）高、水の中での水一番。江戸の水際立物と、今や若手の流行りっ子が、鬼打ち豆におっ払へば、うぬらが鼻も悪魔降伏、怨敵退散、西の海さらり

〳〵と追ひこくる、あら心地よい有様ぢゃよなア。

一ッ　雪の友成	二ッ　一夜なほし	
三ッ　朝日野	四ッ　黒平	
五ッ　えりおしろい	六ッ　三津の友	

（注）値段は百五十文・百文・五十文（**七・繁・出**）。似顔絵は「賑式亭まさる双六」・「江戸の水まさる双六」とも三代目河原崎長十郎（初代河原崎権十郎／九代目市川團十郎）。

コマ22

コマ22

えりおしろいのお艶《三百日せき　四妙あらひこ／五あづま姫　六薄けしやう》

〈一夜なほしで風の神のあくまをはらひ／江戸の水のおやかたさんが／にせ組のわるものをとり／ひしぐとなりとうへの／すぐれびとにまけ／ずにわたしも正／めいあくぬきの／えりにえらみし／ごく上製おんめし／ものゝえりにつく／いやみなことは／きついきらひこゝろは／きよいかんのみづ／さらしぬいたるにほひいり／ぱつちりなどはお

よばぬ事さ

〻一夜直しで風（風邪）の神の悪魔を祓ひ、江戸の水の親方さんが偽組の悪者を取りひしぐ。隣と上の優れ人に負けずに、私も正銘あく（悪）ぬきの、襟に選みし極上製。御召し物の襟につく、嫌みなことはきつい嫌ひ。心は清い寒の水。晒しぬいたる匂ひ入り。ぱっちりなどは、およばぬ事さ。

（注）値段は百文・五十文・三十二文（**七・出**）、五十文・三十二文（**繁**）。似顔絵未詳。

コマ23

三津（みつ）の友平（ともへい）《一あづま姫　三雪の友／五一夜なほし　六はやめ》

コマ23

〻雪月花の三しないりうれるに／つれてふたゝびひろむる三津の友平／おともははづれぬいろやつこ／ゆきのはだへに月のまゆ／はけ花のかんばせ／うるはしくするのは／えての大とりげ／ふりだせ〳〵ふり／だしのおしろい入を／はじめとして／なにゝかぎらず／まゆはけるゐ／おもとめあれやおとくいがた

〻雪月花の三品入り。売れるにつれて再び広むる三津の友平、お供は外れぬ色奴。雪の肌へに月の眉刷毛。花のかんばせ麗しくするのは得手の大鳥毛。振り出せ〳〵、振り出し（冊前六法・粉を振り出す容器・双六のサイコロを振り始め）の白粉入をはじめと

して、何に限らず眉刷毛類、御求めあれやお得意方。

（注）値段は、三品入り、二匁三分（七）。出に商品の記載無し。繁に値段の記載なし。似顔絵未詳。「賑式亭まさる双六」と「江戸の水まさる双六」の似顔絵に変化がある。

＊参考資料「江戸の水まさる双六」

国会図書館蔵「賑式亭まさる双六」には袋がなかったので、参考として、本資料を改題した「江戸の水まさる双六」の袋と序文を掲載する。簡単に書誌等を記す。

■題名　「江戸の水まさる双六」

■著者　式亭小三馬（作）・三代歌川豊国（画）・梅素亭玄魚（袋）

■板元　式亭三馬店（双六）・本町庵三馬（袋）

■改印　なし、「賑式亭まさる双六」にあったものは削除されている。

■刊年　元治元年（一八六四、序）

■装丁　双六は墨摺、一枚、縦三十四cm×横四十五・三cm。色摺の袋と序文が一枚に印刷されており、縦二十三・三cm×十七・三cm。右が表紙、左が序文にあたり、右長辺が糊しろの形になっていて、紙全体を縦に半折してのり付けし、当時の草双紙の袋と同じ筒状を形成していたものと思われる。表紙相当部分の幅が十一・五cm。

■所蔵　国立国会図書館　『江戸の水双六』（寄別8-3-2-7）のうち、袋 DOI: 0.11501/1302352、双六 DOI:

図４ 「江戸の水まさる双六」（国会図書館蔵）

10.11501/1302346（二〇二三年三月一日参照）。『江戸の水双六』は三馬店の双六五種を袋などと共にまとめた帖で、今回商品値段の参照に使用した「賑式亭繁栄双六」・「初商出世双六」も共に収録されている。

右の通り、「江戸の水まさる双六」の袋は、幕末に草双紙などの装丁で活躍した梅素亭玄魚がデザインを担当している。三馬の「三」をデザイン化したものと、たくさんの「馬」をデザイン化した店の商標をあしらった地に、中央に貼りつけた絵題簽の意匠で大きな富士を正面に、三馬店のある通りの正月の様子を描く。退色しているので実際の色はわからないが、その前の時代の袋とは違って華やかな印象を受ける。

例えば天保改革からほどない時期の名主印が一つの時代に作られた「賑式亭繁栄双六」（改印「村田」、天保十四年から弘化四年）はデザイン化した商標を用いて墨を中心に色をさすという形で、意識して色を抑えている印象がある。序文も「乍憚御礼口上」（はばかりながらおんれいこうじょう）と、商標の顔をもった主人が裃を着て、両手をついて頭を下げ、謹んで挨拶する図を中央に置

図５　「江戸の水まさる双六」袋（表・序）

いて挨拶文が書かれている。そして安政元年九月の改印がある「初商出世双六」（改印「改・寅九」）でも「賑式亭繁栄双六」と同じ序文を使う。袋に色摺りが戻ってきているとはいえ、背景は式亭三馬の印章をデザイン化したもので、改まった物堅い印象である。このように、両者には天保改革の出版統制の影響が垣間見られるが、草双紙の表紙においても色版などの修正が様々変更されるように、これらの資料だけでこの題名の資料の特徴について確定的なことを述べるのは難しい。今は所見資料の報告のみとしておく。

表

［熨斗］御年玉／梅素［印］
江戸の水［商標］双六
式亭小三馬作［印］／一陽斎豊国画［印］
《新暦／佳儀》本町庵三馬蔵版

序

＊文字・ふりがなは原文の通り翻字したが、改行を「／」で示し、読みやすさのために読点「、」を加えた。「°」は原文通りである。

月のむさしのひらけてより、東の花の春は曙、やう〳〵白きは艶な薄化粧に／江戸褄のはでやかにして、吾嬬男の通言。江戸染と共に日々に新なり、江戸仕立の／当世風は京坂の風流家も好むなど、吾大江門の名誉にして。金の鯱の下に／うまれて。水道の水を産湯にあびるてふ。江戸ッ子のありかたさなるべし。江戸川の水に／鄙びたる垢を清げば、江戸ぶしの妙音高く。異国までひゞく河東のひとふし／蛇の目傘に六合。広き恩恵を、江戸紫の抹額は戯場の花。お江戸のはりは北里の／花嬢。堀兼の井のそこともわかで、掘抜の井の八百八街に繁くして。お江戸の／水の流絶せぬ。四時の遊観。四季の交加。月雪花の化粧の具は、豊な御代の庇／陰にて、其外家製の薬品は、江戸八景□眺と共に勝れて、功能は江戸鹿子の／数ふるに遑あらず、各おとらぬ奇効を□（江、ふりがな「え」カ）戸自惚の勇しう。江戸の花に模擬／たる時世粧は、梅が佳例の【商標】双六江戸の□（春カ）の眺にせんと、殊に気をはる袋入／江戸気の諸君の左祖を冀ふにこそ

□□□三馬誌［印］（式亭小）

春興

豊なる歳も甲子賑はしふ御客は【商標】かどの目じるし

（注）「甲子」は元治元年（一八六四）。

今後の課題

今回の翻字と校訂という作業を通じて考証をする際に必要だと考えた事柄を記録しておく。今後の課題としたい。

1、文章の注釈。本資料のコマ中の文章は、歌舞伎の名乗りを擬したもので、文学や演劇で共有される言葉やイメー

ジ、さらに商品の持つ特性を踏まえた掛詞や縁語が駆使されている。校訂の根拠となった考えを別の機会に示したい。

2、コマ絵に描かれる役者似顔絵の考証。前述の通り、「賑式亭まさる双六」と似顔絵を一部入れ替えた「江戸の水まさる双六」の似顔絵について藤澤茜氏の教示を得る機会を得た。その指摘によれば、両者の似顔絵は、一般的な浮世絵や文芸における似顔絵の使い方とは違い、時代の流行にかならずしも沿っていない、活躍時期の異なる役者が混在している。例えば、八代目市川團十郎など用いてしかるべき存在の不在をどう考えればよいのか。改印から考えると、八代目が本資料刊行の数年後に歿しており、この双六自体が、初版時の形を変えている可能性もある。また本資料には、本文の詞章には合わない家柄の人物が掲出されるほか、若い顔のまま長年保持される役者、同一人物にもかかわらず修正される役者、市川家・岩井家などその系統の雰囲気を伝えるが特定の個人として描かれていない存在など、様々な要素が垣間見られる。おそらくこうした事象は、店の広告であることから生じたのだろう。役者の選定や、時々の修正は出版事情を知る手がかりにもなり得るだけに、多角的な考証が望まれる。

3、出版物としての考証。周知の通り、天保改革の出版統制では、倹約令の遵守が求められ、浮世絵・草双紙類における役者・遊女・女芸者の画像・言及の排除、草双紙の表紙の彩色の禁止が言い渡された。検閲も強化され、草双紙にも改印が押されるようになった。三馬店のこうした出版物も改印があるように、それに準じた形で作られていた[12]。故に政治史・出版史の動向を踏まえて考察する必要がある。また草双紙などで行われていたように、同一書名であっても初印の形だけでなく、特装や後印では細々変化するので、これらの資料もいくつかの形で出版

された可能性がある。いわゆる悉皆調査が望まれる。

4、三馬店の広告としての考証。今回、一つの目安として天保期・天保改革直後・安政期の双六で商品の価格や実態を補足したが、それでは不十分なのは明らかである。数多く制作された同店の広告用の出版物だけでなく、広告が掲載されている大量の三馬と小三馬の著作の諸本（同一書名の本）を調査する必要がある。[13]

（津田）

謝辞

前述の通り、三代歌川豊国の似顔絵につき藤澤茜氏に多大なる御教示を賜った。また双六の翻字の方法につき、近世文学研究会の延廣眞治氏、松原哲子氏、関原彩氏、孫貞娥氏に御教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。また本稿は、慶應義塾大学教養研究センター「デジタル化時代の古典文学・書誌学の研究と教育」プロジェクトに関わる成果である。

注

（1） 林美一『江戸広告文学』乾・坤、江戸文学刊行会、一九五五年。花咲一男『江戸広告文学　続』、近世風俗研究会、一九六四年など。近年では、二又淳「戯作者と広告」、『AD・STUDIES』五、二〇〇三年八月、十五―十七頁など。江戸文学の立場から、具体的な例示をきめ細やかに行っている。

（2） 山本正勝『絵すごろく―生いたちと魅力―』、芸艸堂、二〇〇四年。坂口由之『江戸の広告作法　えどばたいじんぐ』、吉田秀雄記念事業財団、二〇二〇年。

（3） 穎原退蔵「三馬の広告文学」、『書物礼讃』8、一九二八年七月、十四―十八頁。本田康雄『式亭三馬の文芸』、笠間書院、一九七三年。棚橋正博『式亭三馬　江戸の戯作者』ぺりかん社、一九九四年。吉丸雄哉「式亭三馬年譜稿（二）―文化五年

以降―」、『三重大学日本語学文学』二十五、二〇一四年六月、二十五―三十七頁。浅埜晴子「戯作者と広告―式亭三馬店を例にして―」、『中央大學国文』四十七、二〇〇四年三月、二十九―三十六頁など。

（4） Hower, R. M. *The History of an Advertising Agency: N. W. Ayer & Son at Work, 1869-1949* (Rev. ed.). Cambridge: Harvard University Press, 1949. Laird, P. W. *Advertising Progress: American Business and the Rise of Consumer Marketing*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1998. Hahn, H. “Boulevard Culture and Advertising as Spectacle in Nineteenth-Century Paris.”, In *The City and the Senses: Urban Culture Since 1500*, edited by Alexander Cowan and Jill Steward, Burlington: Ashgate Publishing, Ltd., 2007, pp. 156-177.

（5） 榎本悟・松田周司「広告産業の発展と広告代理店」、『国際学研究』一、二〇一二年三月、二十一―三十八頁。

（6） Escalas, J. E. “Narrative Processing: Building Consumer Connections to Brands”, *Journal of Consumer Psychology*, vol. 14 (1&2), 2004, pp. 168-180. Pulizzi, Joe. “The Rise of Storytelling as the New Marketing”, *Publishing Research Quarterly*, vol. 28, no. 2, 2012, pp. 116-123.

（7） 福田怜生「広告の物語性と情報提供性が広告態度に及ぼす影響―広告形式における表現特性の尺度開発と影響の検討―」、『マーケティングジャーナル』三十八-二、二〇一八年九月、九十一―一〇六頁。

（8） Youn, S. and Lee, M. “In-Game Advertising and Advergames: A Review of the Past Decade’s Research”, In *Advertising Theory*. edited. by Shelly Rodgers and Esther Thorson, New York: Routledge, 2012, pp. 388-401.

（9） 改印から類推する刊行年については、佐藤悟「名主双印試考」（『浮世絵芸術』一二九、一九九八年九月、三―九頁）の考察に従った。

（10） 桝田静代『絵双六―その起源と庶民文化』京阪奈情報教育出版、二〇一四年。関原彩氏の教示による。

（11） 佐藤悟「文芸資料研究所蔵『草紙合高評双六』解題」（「調査報告」六十）、『実践女子大学文芸資料研究所年報』十八、一九九八年三月、三二〇―三二三頁。

（12） コマの注に記したように改革直後の「賑式亭繁栄双六」では、商品が無い、一番安い値段だけを出すなどの事例が散見された。特に匂い袋の一番高い「花の宴」の値段が他の時期の双六より値下げされている。

（13） 津田眞弓「京伝店七十年（余）史にむけて」、月報『山東京傳全集』十二巻、ぺりかん社、二〇一七年、五―八頁。作中に広告を出し、自身の店で商品販売をしていた山東京伝店の動向を広告から追ったもの。三馬店の全容を知るためには、同じ作業が必要と思われる。